

白くれない

夢野久作

青空文庫

残怨白紅花盛

余多人切支丹寺

「ふうん読めんなあ。これあ……まるで暗号じゃないかこれあ」
 私は苦笑した。二尺三寸ばかりの刀の中心なかごに彫った文字を庭先の夕明りに透かしてみた。

「銘めいは別に無いようだがこの文句は銘の代りでもなさそうだと
 いて詩でもなし、和歌うたでもなし、漢文でもないし万葉仮名でも
 ないようだ。何だい……これあ……」

「へえ。それはこう読みますんだそうで……残る怨み、白くれな
 いの花ざかり、あまたの人を切支丹寺キリシタン……とナ……」

私はビツクリしてそう云う古道具屋の顔を見た。狭心症にかかっているせいか、一寸ちよつとした好奇心でも胸がドキドキして来そうなので、便々たる夏肥ふとりの腹を撫でまわして押鎮おししずめた。

幫間ほうかん上りの道具屋。瘠せつこちの貫七じい爺は済まし返って右手を頭の上に差上げた。支那扇をパラリと開いて中禿のマン中あたりを煽ぎ初めた。私はその顔を見い見い裸はだかみ刀身を無造作に古鞆に納めた。

「大変な学者が出て来たぞ……これあ。イヤ名探偵かも知れんのお前は……」

「へエ。飛んでもない。それにはチツトばかり仔細わけが御座いますんで……へエ。実はこの間、旦那様からどこか涼しい処に別荘地

はないかと、お話が御座いましたので……」

「ウンウン。実に遣り切れんからねえ。夏になつてから二貫目も殖えちや堪まらんよ」

「へへへ。私なんぞはお羨しいくらいで……」

「ところで在ったかい。いい処が……」

「へエ。それがで御座います。このズツト向うの清滝つてえ処で
げす」

「清滝……五里ばかりの山奥だな」

「へエ。市内よりも十度以上お涼しいんで夏知らずで御座います。そのお地面の前には氷のような谷川の水がドンドン流れておりますが、その向うが三間幅の県道^かなんで橋をお架^かけになればお宅の

お自動車が楽に這入ります。結構な水の出る古井戸や、深い杉木立や、凝ったお庭造の遺跡が、山から参いります。石、笥の水と一所に附いておりますから御別荘に遊ばすなら手入らずなんで：

……

「高価いだろう」

「それが滅法お安いんで……。まだそこいらに御別荘らしいものは一軒も御座いませんが、その界隈の地所でげすと、坪、五円でもいい顔を致しませんのに、その五六百坪ばかりは一円でも御の字と申しますんで……。へエ。話ようでは五十銭ぐらいに負けはせぬかと……」

「プツ……馬鹿にしちやいけない。そんな籠棒な話が……」

「イエイエ。それが旦那。シラ真劍なんで……ヘエ。それがその何で御座います。今から三百年ばかり前に焼けた切支丹寺と申しますものの遺跡あとなんだそうで……ヘエ」

「フウム。切支丹寺……切支丹寺ならドウしてソナナに安いんだい」

「それがそのお刀の彫物の曰く因縁なんで……ヘエ。白くれないって書いて御座んしょう。その花を念のため、ここに持って参りました。これが花でコチラが実と葉なんで……ちよと隠元豆に似ておりますが」

「ううむ。花の色は白いといえれば白いが、実の恰好がチツト変テコだなあ。紫色と緑色の相あいの子みたいじゃないか。妙にヒネクレ

て歪んでいるじゃないか」

「ところが実を申しますとこの花の方が問題なんで……とても凄
いお話なんで……へエ」

と云ううちに貫七爺は眼の球を奥の方へ引込まして支那扇を畳
んだ。その表情が東京の寄席で聞いた何とかという怪談屋の老爺に
ソツクリであつた。

「……へエ。その切支丹寺の焼跡あとになつております地面は、只今
のところズツト麓の方に住んでおります区長さんの名義になつ
ておりますが、その区長さんのお庭先に咲いておりますくれない
の花と申しますのはこれなんで……へエ。御覧の通り葉の形か
ら花の恰好まで白い方の分とソツクリで御座いますが、ただ花の

色だけが御覧の通り血のように真赤なんで……昔からくれないの花と申して珍重されていたものだそうで御座います。へエ。その切支丹寺でも三百年前にこの花を植えていたそうで御座いますが、その寺で惨酷むごい殺され方を致しました男だか、女だかが死に際にコンナ事を申しましたんだそうで……この怨みがドンナに深いか、お庭のくれないの花を見て思い知れ。くれない紅の花が白く咲いているうちは俺の怨みが残っていると思えつてそう云つたんだそうで……でげすから只今でもその焼跡あとに咲いておりますくれなひの花だけは御覧の通り真白なんだそうで御座います」

「プツ……夏向きの怪談じゃないか丸で……どうもお前の話は危なっかしいね。マトモに聞いてたら損をしそうだ」

「へエ。どんな事か存じませんが証拠は御覧の通りなんでへエ。

……でげすから村の連中は子供でもそのキリシタン寺の地内へ遊びに遣りませんそうで……あの地内でウツカリ転んだりすると破傷風になるとか、何とか申しましてナ……」

「フウム。そんな事が在るもんかなあ今の世の中に……」

「へエ。何だか存じませんが三百年前にその切支丹寺で、もぎどう没義道

に殺された人間の白骨が、近所界隈の山の中から時々出て来るそ

うで御座います。梅雨時分になりますと、よく人ひとだま魂が谷々を渡

りまして、お寺の方へ参りますそうで……へエ。手前共も怖こおう

御座んしたが、思い切つてその荒地の中へ立ち入りまして、スツ

カリ見て参りました。ついで序に御参考までもと存じまして、方丈の跡

らしい処に咲いておりましたこの花を摘んで参いましたんで……何しろ珍らしい、お話の種と思いましたが……へエ」

貫七爺は、そう云つて又眼玉を凹ました。扇を開いて汗掻いた頭を上の方から煽ぎ初めた。

私はイクラカ薄気味わるく、その白くれないの花を掴み上げてみた。

「ふうむ。俺の知っている奴が九州大学の農学部に居るからこの紅と白の花を両方とも送つてやろう。おんなじ花が植えた処によつて違つた色に咲くような事実が在り得るかどうか聞いてやろう。怪談なんでもものは、ちよとしたネタから起るもんだからね」

「へエ。それが宜しゆうがしよう。案外掘つてみたら切支丹頃の

珍品が出て来るかも……」

「馬鹿。商売気を出すなよ」

「へへへ。千両箱なんぞが三つか四ツ……」

「大概にしろ。そんな事あドウでもいい。それよりも問題はこの
刀身だ」
かたな

私は、今一度、古鞘から裸刀身を引出した。
はだかみ

「いい刀身だよ。磨とぎは悪いがシヤンとしている。中心なかごは磨すり上あげら
しいが、しかし鑑定には骨が折れるぞコイツは……」

「へへへ、……そう仰言ればもう当ったようなもんで……」

「黙つてろ……余計な文句を云うな。ふうむ。小丸気味の地藏帽
子で、五ぐの目めの匂におい足あしが深くつて……打掛疵うちかけきずが二つ在るのは珍ら

しい。よほど人を斬った刀だな。先ず新藤五しんとうごの上作と行くかな……どうだい」

「……ハイ。結構ですが、新藤五は皆様の御鑑定の行止まりな
んで……へエ」

「零イヤ点なのかい……ウーム。驚いたよ。お前は知っているのかい
作者うちてを……」

「へエ。存じております。この刀身かたなだけの本阿弥いえもとなんで……へエ」

「ムウム。弱ったよ。関でもなしと……一つ直江志津なおえしづと行くかな」

「へエツ。恐れ入りました。二本目当り八十点……この福岡では
旦那様お一人で……」

「おだてるなよ。しかし直江志津というと折紙でも附いているの

かい本阿弥さんほんあみ」

「へへ。……それがその……折紙と申しますのはこのお書かきつけ付な
んで……へエ」

貫七爺は懷中から新聞紙に包んだ分厚い罫紙の帳面を取出した。
生漉ずきの鳥の子で四五帖分はある。大分古いものらしい。

「どこに在ったんだい。そんなものが」

「へエ。やはり今申しました区長さんの処に御座いましたんで……
何でもその区長さんと申しますのが太閤様時代からその村の名
主さんだったそうで……」

「成る程。その人が地所と一いっしょ所にこの刀を売りに出したんだな」

「へエ。当主があんまり正直過ぎて無尽むじん詐欺に引つかかったんだ

「それで……」

「それじゃこの帳面は刀身かたなと一所に貫つといていいんだナ」

「へエ。どうぞ。まあ内容なかを御覧なすつて……私どもにはトテも読めない、お家様で御座います」

「ふうむ。待て待て……」

私は書見用の眼鏡をかけて汚染しみだらけの白紙の表紙を一枚めくつてみた。（註曰。以下掲ぐる文章は殆んど原文のままである。読み難いにく仮名を本字に、本字を仮名に、天爾遠波てにをはの落ちたのを直し補った程度のものに過ぎない）

かたつらおにさぶらう
片面鬼三郎 自伝

われ生まれて神仏を信ぜず。あまたの人を斬りて罪業を重ね、
恐ろしき欺罔ゲレンの魔道に迷ひ入り、殺せつしやう生まきに増る邪道に陥り行く
うち、人の怨みの恐ろしさを思ひ知りて、われと、わが身を亡ぼ
しをはんぬ。その末期まつごの思ひに、われとわが罪を露あらはし、思ふ事
包まず書残して後の世の戒めとなし、罪障懺悔のよすがともなさ
むとて、かくなむ。

父母の御名は許し給ひねかし。

われは肥前唐津の者。門地高き家の三男にて綽名を片面鬼三郎
となん呼ばれたる者也。

後陽成天皇の慶長十三年三月生る。寛永六年の今年五月に死するなれば足かけ二十五年の一生涯なり。

わが事を賞むるも愚かしけれど、われ生得みめ容かたち、此上こよなく美はしかりしとなり。されども乳母の粗忽とか聞きぬ。三歳の時、あろり困炉に落ちしとかにて、右の半面焼け爛れたぐ、偏へひとに土塊つちくれの如く、眉千切れ絶え、まなじり皆白く出で、唇、狼の如く釣り歪みて、鬼とや見えむ。獣とか見む。われと鏡を見て打ち戦をのくばかりなり。

されば名は体を躰あらはし、姿は心を写すとかや。われ生ひ立つに連れて、ひがみ強く、言葉に怨みあり。われながら、わが心の行末を知らず。両親に疎まれ、他人にあなづられて、心の僻ひがみ愈々増まさり募つるのみなりしが、たゞ學問と、武芸の道のみは人並外れて

出精し、藩内の若侍にして、わが右に出づる者無し。もとより柔弱なる兄等二人の及ぶ処に非ず。一年、御城内の武道試合に十人を抜きて、君侯の御佩刀、直江志津の大小を拝領し、鬼三郎の名いよく藩内に振ひ輝きぬ。

さる程に此事を伝へ聞きし人々、おのづから、われに諛ひ寄り来るさへをかしきに、程なく藩の月番家老よりお召出あり。武芸学問、出精拔群の段御賞美あり。年頃ともならば別地を知行し賜はるべし。永く忠勤を抽ん出可き御沙汰を賜はりしこそ笑止なりしか。

もとより、われは一握り程の碌米の為に、忠勤を抽出んとて武芸、学問を出精せるに非ず。半面鬼相にもあれ、何にもあれ。

美しき女を数多侍らせ、金殿玉楼に栄耀の夢を見つくさむ事、偏ひとへにわが学問と武芸にこそよれ。容貌おもて、醜しとあれば疎み遠ざかり、あざみ笑ひ、少しの手柄あれば俄かに慈しみ、へつらひ寄る、人情紙の如き世中よのなかに何の忠義、何の孝行かある。今に見よ。その肝玉を踏み潰し、吠面ほえづらかゝし呉れむと意気込みて、いよゝ腕を磨きければ二十一歳の冬に入りて指南役甲賀味心斎より柳生流の皆伝を受くるに到りぬ。

此時、われに縁談あり。藩内二百石の馬廻り某なにがしうち氏の娘御むすめごにしてお奈美殿となん呼べる今年十六の女性なりしが、御家老の家柄にして屈指の大身なる藤倉大和殿夫婦を仲人に立て、娘御の両親も承知の旨答へ来りし体てい、何とやらむ先方より話を進め来り

し気はひなり。

われ何となく心危ぶみて、自身に藤倉大和殿御夫婦をおとな訪ひ、お

奈美殿は藩内随一の御綺きりやう倆とこそ承れ。いまだ一度の御見合ひ

を遂げざるに御本人の御心如何いかゞあらむ。相手の婿がねが某それがしなる事、

屹度、御承知に相違御座なきやと尋ねし処、藤倉殿申さるゝ様。

奈美女殿の母親は当家より出でたるものにて、奈美女と、われ等

夫婦とは再またいとこ従妹の間柄に当れり。何なんぞう条粗略なる事致すべき。

殊に奈美女は孝心深き娘なり。両親さへ承知すれば何の違背かあ

るべき。這こは決して仲なかうどぐち人口に非ず。申さば御身のお手柄とも見

らるべし。左様なる事、若き人の口出しせぬものぞかし。一切を

われ等に任せて安堵されよと言葉をつくしたる説ことわけ明なり。われ

も強ひて抗ひ得ずして、成り行く儘に打ち任せつゝ年を越えぬ。

かくて兎も角も其夜となり、式ども滞なく相済み、さて嫁女と

共に閨ねやに入るに、彼の嫁女奈美殿、屏風の中にひれ伏してシミ／

＼と泣き給ふ体ていなり。われ胸を轟かしつゝ、今宵の婿がね、此

の片面鬼三郎なりし事、兼ねてより御承知なりしやと尋ねしに、

奈美殿、涙ながらに頭を打振り給ひて、否とよ。何事も妾わらはは承り

侍らず。何事も母上様がと云ひさして又も、よゝとばかり泣き沈

まるゝ体なり。因ちなみに奈美殿の母親は継母まはなり。しかもお生家さとが

並々ならぬ大身なる処より、嬖天下かゝあの我儘一杯にて、継子いぢ苛めの

噂もつばらなる家なり。されば最初よりかゝる事もやあらむと疑

ひ居りし我は、恥かしさ、口措くちをしさ総身にみちくゝて暫時しばし、途方

に暮れ居たりしが、やがて嫁女奈美殿の前に両手を支へつ。此の粗忽はわが不念ぶねんより起りし事なり。平に許させ給ふべしと、詫言するとひとしく立上り、奥の間にて喜びの酒酌み交し居りし仲人、藤倉大和殿夫婦を右、左に斬り倒ふし、うろたへ給ふ両親をかへりみて、われ乱心したりとばし思おぼしめ召されなよ。今一人斬るべき者の候間、それを見てわが心を知らせ給へ。孝不孝はかへりみる処に非ず。虚偽は男子の禁物なり。鬼三郎の一念、今こそ思ひ知り給へやと云ひ棄て、走り出で、奈美殿の両親の家を訪ひ、驚きて迎へに出で来る継母御を玄関先に引捕へて動かせず。静かに鬼三郎の云ふ事を聞き給へ、義理の娘が憎にくくさの余り、生家方さとかたの威光を借りて、かゝる縁談を作り上げ、吾を辱かしめ給ひしに相違あ

るまじ。その御自慢のお家柄、藤倉殿御夫婦は唯今討果したるばかりなり。性根を据ゑて返答し給へ。如何にくと問ひ詰むるに、默然として答無し。すなはち一刀の下に首を打落して玄関に上り、物蔭にて打戦をの、き給ふ奈美殿の父御を探し出し、やよ。岳父御しうとごよ。よく聞き給へ。此度の事は泰平の御代に武道を忘れ、縁辺の手柄たよりを頼に出世を望み給ひし御身の柔弱より出でし事ぞかし。今夜斬りし三人の顔触れを見給はゞ奈美殿の清浄潔白は証明あかし立つ可し。安心して引取り給へ。われは生涯、女を絶ち、おとなしき娘御の孝心に酬いまゐらすべし。さらばくと云ひ棄て、其の家を出で、夜もすがら佐賀路に入り、やがて追ひ縋り来りし数多の捕手とりてを前後左右に切払ひつゝ、山中に逃れ入り、百姓の家に押入りて物を乞

ひ、押借り強盗なんどしつゝ早くも長崎の町に入りぬ。

長崎は異人群集の地、商売繁昌の港なり。わが如き者は日本に

在りては国の災ひ也。異国に渡りて碧眼奴どもを切り従へむこ

そ相応しけれと思ひ定めつ。渡船の便宜もがなと心掛け歩りくう

ち、路用とても無き身のいつしか窮迫の身となりぬ。詮方無さ

に町道場に押入りて他流試合を挑み、又は支那人の家に押入りて

賭場荒しなぞするうちに、やがて春となりし或る日の午の刻下り

のこと諏訪山下、坂道の途中にて一人の瘠せ枯れたる唐人の若者

に出会ひしに、しきりに叩頭して近付き来る。何事やらむと立佇

まれば慌しく四隣を見まはし、鮮やかなる和語に声を秘めつゝ、

御頼み申上げ度き一儀あり。枉まげて吾が寝泊りする処まで御足勞賜はりてむやと、ひたすらに三拝九拝する様なり。すなはち心得たる体にて彼かの唐人に誘はれ行くに、港の入口、山腹の中途に聳え立つ南蛮寺の墓地に近く、薬草の花畑を繞めぐらしたる一軒の番小舎あり。その中に山の如く積み上げたる藁の束を押し分けて、いと狭き落し戸より、真暗き石段を降り行けば、やがて美しく造り飾りたる窖あなぐらに出でぬ。得も云はれず芳ばしき煙、夢の如く棚引き籠もれり。

其処までわれを誘ひ入れし若き唐人は、やがて吾を長崎随一の漢藥商、黄駝となん呼べる唐人に引合はせぬ。

其の黄駝といへる唐人、同じく三拝九拝して、われに頼み入る

処を聞けば別儀に非ず。六神丸の秘方たる人胆ひとぎもの採取なり。男女二十歳以上三十歳までの生胆金二枚也。二十歳以下十五歳まで金三枚也。十五歳より七歳まで五枚也。七歳以下金十枚といふ話也。

黄駝は肥大、福相の唐人。恭しくわれに銀器の香煙を勧むるに、弁舌滑らかにして甘脂の如し。此の六神の秘方は江戸の公方、京都の禁裡の千金の御命を救ひ参らせむ為に、年々相あひとゝの調へて献上仕るもの。虫むしけら虻と等しき下賤の者の生命いのちを以て、高貴の御命を延ばし参らせむ事、決して不忠の道に非ず。貴殿の御武勇を以て此事を行ひ賜はらば一代の御栄耀ごええう、正に思ひのまゝなるべしと、言葉をつくして説き勧むるに、われ、香煙の芳香にほひにや酔ひた

りけむ。一議に及ばず承引きつ。其夜は其の花畑の下なる怪しき
あなぐら土室にて雲烟、恍惚の境に遊び、天女の如き唐美人の妖術に夢
 の如く身を委せつ。

眼ざめ来れば、身は南蛮寺下の花畑の中に在り。茫々乎として
 万事、皆夢の如し。わが曾て岳父御しうとごに誓ひし一生不犯ふほんの男の貞操
 は、かくして、あとかたも無く破れ了んぬ。

われ此時、あまりの浅ましさに心挫くじけ、武士の身に生れながら、
いきぎも生胆取りの営業なりほひを請合ひし吾が身の今更におぞましく、情な
 く、長崎といふ町の恐ろしさをつく／＼と思ひ知りければ、今
 は片時も躊躇ためらふ心地せず。そのまゝ南蛮寺を後にして、諏訪神社
 の石の鳥居そがひにも背を向け、足に任せて早岐の方を志す。山々の段

々畠に棚引く菜種、蓮花草の黄に紅に、絶間なく揚る雲雀ひばりの声に、
 行衛も知らぬ身の上を思ひ続けつゝ、幾度となく欠伸し、痴呆うつけの
 如くよろめき行く様さまひとへに吾が生胆いきぎもを取られたる如し。

さる程に不思議なる哉。いまだ左程に疲れもやらぬ正午下りの
ひるさが

頃ほひより足の運び俄かに重くなりて、後うしろがみ髪引かるゝ心地し

つ。昨日吸ひたる香煙かうえんの芳ばしき味ひ、しきりになつかしくて

堪へ難きまゝに、われにもあらず長崎の方へ踵くびすを返して、飛ぶが

如く足を早むるに、夢うつゝに物思ひ来りし道程みちのりなれば、心覚

え更に無し。今来し道を人に問ひくゝ引返し行く程に、いつしか、

あらぬ山路に迷ひ入りけむ、行けどもくゝ人家見えず。されども

香煙のなつかしさは刻々に弥いやまさ増り来りて今は心も狂はむばかり。

胸轟き、舌打ち乾き、呼吸いそぎも絶えなむばかりなり。

折ふし薪を負ひて、さがしき岩道を降り来れる山乙女あり。われ半面を扇にて蔽ひつゝ、その乙女を呼び止めて、長崎へ行く道を問ふに、乙女は恥ぢらひつゝ笠を取り、いと懇ねんごろに教へ呉れぬ。彼の長崎にて見し紅化粧したる天女たちとは事変り、その物腰のあどけなさ、顔容かほばせのうひくしき、青葉隠れの初花よりも珍らかなり。

われ、かく思ひつゝも恭しく礼を返し、教へられし方に立去らむとせしが、又、忽ちに心変りつ。四隣あたりに人無きを見済まして乙女の背後より追ひ縋り、足音を聞いて振り返る処を、抜く手を見せず袈裟けさが掛けに斬り倒ふし、衣服を剥ぎて胸を露あらはし、小束こづかを逆さ

手に持ちて鳩骨を切り開き、胆たんなう囊と肝臟らしきものを抉り取
 りて乙女の前垂に包み、傍の谷川にて汚れたる手足と刀を洗ひ淨
 めつゝ一散に山を走り降り、胆きもあるじの主が教へ呉れし通りに山峡の間
 を抜け、村里と菜種畠をよぎり行くに、やうくにして日の暮れ
 つ方、灯ともしび火美しくしき長崎の町に到り着きつ。夕ゆふやみ暗の中に彼か
 花畑の中の番小舎の扉を叩きぬ。

番人の瘠せ枯れたる若き唐人、驚き喜びて迎へ入るゝに、下の
 土室あなぐらにて待兼ねたる黄駝の喜びは云ふも更なり。わが携へたる
 生胆を一眼見るより這こは珍重なり。お手柄なり。たしかに十七八
 歳なる乙女の生胆なりとて、約束の黄金三枚を与へしのみかは、
 香煙、美酒、美肴に加ふるに又も天女の如き唐美人の数人を饗もてな応

し与へぬ。その^{もてなし}歡待、昨日にも増り（以下原文十行抹殺）。

かくて年月を^ふ経るうちに鉄の如くなりしわが腕の筋も、連日連夜の遊樂に疲れけむ。やう／＼に弱り行く心地しつ。されども彼^かの香烟の酔ひ醒めの心地狂ほしさはなかくに切^{きつさき}先の冴え昔に増^{まさ}る心地して、血に餓うるとは是をや云ふらむ。毎日正午ともなれば人一人斬らでは止み難く、斬れば早や香煙に酔ひたる心地して、南蛮寺下の花畑に走り行く。心は現世の鬼畜、悪魔、外道に^{いやまさ}弥増るやらむ。身は此世ならぬ極楽夢幻の楽しみ。阿羅岐^{あらかき}の蘇^ス
^{コチン}古珍酒、裸^{らぎやう}形の妖女に溺れつくして狂乱、泥迷に昼夜を^{わか}頷たねば、使ふに由なき黄金は徒らに積り積るのみ。すなはち人知れず
 稲佐の大文字山に登り行き、^と只有る山蔭の大岩の下に埋め置きつ。

早や数百金にもなりつらむと思ふ頃、その中より数枚を取り出し、丸山の妓楼に上り、心利きたる幫間に頼みて、彼の香煙の器械一具と薬の数箱を価貴く買入れぬ。こは人に知らせじと思ひし、わが人斬りの噂、次第に高まり来りて、いつしか長崎奉行、水尾甲斐守の耳に入りしと覚しく、与力、手先のわれを見送る眼付き尋常ならざるに心付き、人知れず身を晦まさむ時の用意に備へたるものにぞありける。

去る程に其の春の末つ方の事なりけり。何の故にかありけむ。

此の長崎にて切支丹の御検分おんあらためことのほか厳しくなり、丸山の妓楼の花魁衆おいらんにまで御奉行、水尾様御工夫の踏絵の御調べあるべ

しとなり。当日の模様、物珍らしきまゝに、われも竹矢来の外の群集に打ちまじりて見物するに、今しも丸山一の大家、はつはなろう初花楼の太夫職にして、はつはな初花といふ今年十六の全盛なる少女が、厳めしき検視の役人の前にて踏絵を踏む処なりとて人々、息も吐きあへず見守り居るてい体なり。

初花太夫は全盛の花魁姿。金欄、刺繍の帯、うちかけ裯襠、眼も眩ゆく、白く小さき素足痛々しげにあらむしろ荒蕙を踏みて、真鍮のぼくり木履に似たる踏絵の一行に近付き来りしが、小さき唇をそと噛みしめて其の前に立たちと佇まり、四方より輝やき集まる人々の眼を見まはし、恐ろし気に身を震はして心を取直し居る体なり。

傍の下役人左右より棒を構へ、声を揃へて大喝一声、

「踏めい……踏み居らぬか」

と脅やかすに初花は忽ち顔色蒼白となりつ。それを懸命に踏み堪へて、左棲高々と繫からげ、脛はぎしろ白き右足を擡もたげて、踏絵の面おもてに乗せむとせし一刹那、

「エイツ……」

と一声、足輕の棒に遮り止められ、瞬く間に裨褙を剥ぎ取られて高手小手に縄をかけられつ。母かしやまくと悲鳴を揚げつゝ竹矢来の外へ引かれ行けば、並居る役人も其の後よりゾロゾロと引上げ行く模様さま、今日の調べはたゞ初花太夫一人の為めなりし体ていた裁らくなり。

われ不審晴れやらす。思はず傍かたはらを顧るに派手なる浴衣着たる若

者あり。われと同じき思ひにて茫然と役人衆の後姿を見送れる体なり。われ其の男に向ひてひとりごと独言のやうに、

「絵を踏まむとせしものを、何故に切支丹なりとていまし縛めけむ」

とつぶやきしに彼の若者、慌しく四周あたりを見まはし、首を縮め、

舌を震はせつゝ教へけるやう、

「御不審こそ理ことわりなれ。彼の初花楼の主人甚十郎兵衛と申す者。吾

家がやには切支丹を信ずる者一人も候はずとて、役人衆に思はしき袖

の下を遣はざりしより、彼かの様なる意地悪き仕向けを受けたるも

のに候。あはれ初花太夫は母御の病氣を助け度さに身を売りしも

のにて、この長崎にても評判の親孝行の浪人者の娘に候。之これに引

比べて初花楼の主人甚十郎兵衛こそ日本一の愚者にて候へ。すこ

しばかりの賄賂まひなひを吝をしみし御蔭にて憐れなる初花太夫は磔はりつけ刑けいか火焙ひあぶりか。音に名高き初花楼も取潰しのほか候まじ」

と声をひそめて眼をしばたゝきぬ。此の若者の言葉、生粋の長崎弁にて理解し難かりけれど、わが聞取り得たる処は、おほむね右の通りなりき。

さて其後のち、程もなく初花楼の初花太夫が稲佐の浜にて磔はりつけ刑けいになるとの噂、高まりければ、流石さすがの鬼畜の道に陥りたるわれも、余りの事に心動きつ。半信半疑のまゝ当日の模様を見物に行くに、時は春の末つ方、夏もまだきの晴れ渡りたる空の下、燕飛び交ふ稲佐の浜より、対むかうぎし岸の諏訪様のほとりまで、道といふ道、窓といふ窓、屋根といふ屋根には人の垣を築きたるが如く、その中

に海に向ひて三日月形に仕切りたる青竹の矢来やらいに、警固けいこ、檢視けんしの
 与力よりき、同心どうしん、目附めあかし、目明めあかしの類るい、物々しく詰め合ひて、毬棒いがぼう、
 刺さす又また林はやしの如く立並べり。その中央の浪打際なみうちぎはに近く十本の
 柱はしらを樹たて、異人五人、和人五人を架たかげ聯つらねたり。異人は皆黒服、
 和人は皆白無垢しろむくなり。

時あたか恰あも正午せいごに近く、香煙かうえんに飢うゑたる、わが心こころ、何時いづとなく、く
 るめき弱よらむとするにぞ、袂たもとに忍しのばせたる香煙かうえんの脂あぶらを少しづつ爪
 に取りて噛かみつゝ見物けんぶつするに、異人たちは皆、何事なにことか呪文じゆもんの如き
 事を口くちずさみ、交まじるゝ天あまを傾あふぎて訴うふる様さま、波羅伊會はらいその空そらに在ま
 しませる彼等かれらの父ちちの不思議ふしぎなる救すくひの手てを待ち設しくる体ていなり。さ
 れども和人の男女おんなこゝろ達はたゞ、うなだれたるまゝにて物云ものいはず。早

や息絶えたる如く青ざめたるあり。たゞ五人の中央に架かけられたる初花太夫が、振り乱したる髪の下にてすゝり上げく打泣く姿、此上もなく可憐いぢぢらしきを見るのみ。その左の端に蓬たる白髪を海風に吹かせつゝ低首うなだれたるは初花の母親にやあらむと思ひしに、果せる哉。時刻となり。中央の床几より立上りたる陣羽織物々しき武士が読み上ぐる罪状を聞くに、初花の母親が重き病床より引立てられしもの也。又、初花の右なる男は初花楼の楼主。左なる二人の女は同楼の鴛手やりてと番頭新造にして、何れも初花の罪を庇かばひし科とがによりて初花と同罪せられしものなりと云ふ。初花楼に對するお役人衆の憎しみの強さよと云ふ矢来外の人々のつぶやき、ため息の音、笹原を渡る風の如くどよめく有様、身も竦立よだつばかり

なり。

やがて捨札つみとがの読上げ終るや、矢来の片隅に控へ居りし十数人の乞食ども、手にく錆びたる槍を持ちて立上り来りアリヤくくくと怪しき声にて叫び上げつゝ初花太夫を残したる九人の左右に立ち廻はり、罪人の眼の前にて鎧先やりをチャリ、くくと打ち合はし脅やかす。これ罪の最重もつともきものを後に残す慣はしにて、かくするものぞとかや。

その時、今まで弱げに見えたる初花、磔はりつけ刑柱ばしらの上にて屹度きつと、面を擡おもてげ、小さき唇をキリくと噛み、美しく血走りたる皆まなじりを輝やかしつゝ乱るゝ黒髪、颯さつと振り上げて左右を見まはすうち、魂たま切まぎる如き声を立てゝ何やら叫び出いだせば、海を囲かこめる数万の群集、

俄にはかにピツタリと鳴りを静め、稲佐の岸打つ漣の音。大文字山を越ゆる松風の音までも気を呑み、声を呑むばかりなり。

「皆様……お聞き下さりませ。

わたくしは此の長崎で皆様の御ひいきを受けました初花楼の初花と申す賤しい女で御座りまする。

今年の今月今日、十六歳で生命いのちを終りまする前に、今までの御ひいきの御礼を皆様に申し上げます。

なれども私は亡きあとにて皆様の御弔ひを受けやうとは存じませぬ。たとひ、どのやうな悪道、魔道に墜おちませうとも此の怨みを晴らさうと存じまする。

皆様お聞き下されます。

わたくしは切支丹ゆゑに殺されるのでは御座いませぬ。大恩ある母上様を初め、御いつくしみ深い御楼主様、鴛母様おぼしやま、新造あねしや様までも皆、お役人衆のお憎しみのために、かやうに磔刑はりつけにされるので御座りまする。

私は日ひのもと本の女で御座りまする。父ちゝは母はに背そむかせ、天子様に反そむかせる異人の教へは受けませぬ。タツタ一人……タツタ一人の母か様ゝしやまの御病気を治療ようなし度いばかりに、身を売りましたのが仇うなになつて……そこにお出でになる御役人衆しゆのお言葉に靡しきませなんだばつかりに……かやうに日の本の恥を、外とつ国くにまでも晒さらすやうな……不忠、不孝なわたくし……」

苦痛の為にかありけむ。初花の言葉は此処にて切れ／＼に乱

れ途切れぬ。

石の如くなりて聞き居りし役人輩どもは此時、俄かに周章狼狽し初めたるが、そが中にも、罪状を読み上げたりし陣羽織の一人は、采配持つ手もわな々きつ々立上り、

「それ非人輩ども……先づ其の女から」

と指図すれば「あつ」と答へし憎くさげなる非人二人、初花の磔はりつけ刑柱の下に走り寄り、槍を打ち合はする暇もなく白無垢の両の脇下より、すぶりくと刺し貫けば鮮血さつと迸り流る様、見る眼も眩くらめくばかり、力余りし槍の穂先は両肩より白く輝き抜け出でぬ。

あはれ初花は全く身に大波を打たせ、乱髪を逆立さかだたせ渦巻かす

る大苦悶、大叫喚のうちに、

「……母かしやま……濟みませぬツ」

と云ふ。その言葉の終りは唐からくれなゐ紅の血となりて初花の鼻と唇より迸り出づる。

続いて残る九人の生命いのちが相次ぎて磔はりつけ刑柱ばしらの上に消え行く光あ

景りさまを、眼も離さず見居りたるわれは、思はず総身水の如くなり

て、身ぶるひ、胴ぶるひ得堪へむ術すべもあらず。わなゝく指にて裾

をから繋げ、手拭もて鉢巻し、脇差さげの下緒たすきにて襷たすき十字に綾取る間もあ

らせず。腕におぼえの直江志津を抜き放ち、眼の前なる青竹の矢

来を憂かつ矢々々と斬り払ひて警固のたゞ中に躍り込み、

「初花の怨み。思ひ知れやつ」

と叫ぶうち手近き役人を二三人、抜き合せもせず斬伏せぬ。

素破。狼藉よ。乱心者よと押取り囲む毬棒、刺叉を物とも

せず。血振ひしたるわれは大刀を上段に、小刀を下段に構へて嘲

み笑ひつ、

「やおれ役人輩。よつく承れ。

役人の無道を咎むる者無きを泰平の御代とばし思ひ居るか。か
ほどの無道の磔刑を、怨み悪む者一人も無しとばし思ひ居るか。

われこそは生肝取りの片面鬼三郎よ。汝等が要らざる詮議立て

して、罪も無き罪人を作る閑暇に、わが如き大悪人を見逃がした

る報いは覷面。今日、此のところに現はれ出でたる者ぞ。これ

見よやつ」

と叫ぶとひとしく名作、直江志津の大小の斬れ味鮮やかに、群がり立つたるやりぶすま槍襖をかつし憂矢々々と斬り払ひ、手向ふとりて捕手役人を当るに任せてなぐ擲り斬り、或は海へ逐おひ込み、又は竹矢来やらいへ突込みつゝ、海水を朱あけに染めて闘へば、四面数万の見物人は鯨波げいはを作つてどよ動揺めき渡る。さて逃ぐる者は逃ぐるに任せつつ、死骸狼藉たる無人の刑場を見まはし、片隅に取り残されたる手桶柄ひしやく杓を取り上げ、初花のはりつけばしら磔刑柱の下に進み寄りて心静かに跪き礼拝しつ。

「やよ。初花どの。霊あらば聞き給へ。御身の悪念は此の片面鬼三郎が受継みたまぎたり。今の世の悪念は後の世の正道たるべし。痛はしき母上の御霊みたまと共に、心安く極楽とやらむへ行き給へ。南無幽

靈頓性菩提」

と念じ終つて柄杓の水を、血にまみれたる初花の総身に幾杯となく浴びするに、数万の群集の鬨ときを作つて湧き返る声、四面の山々も浮き上るばかりなり。

さて、わが身も心ゆくまで冷水を飲み傾くるに、其の美味うまかりし事今も忘れず。折ふし向岸の諏訪下の渡船場わたしより早船にて、漕ぎ渡し来る数十人の捕吏とりての面々を血刀にてさし招きつゝ、悠々として大文字山に登り隠れ、彼かの大判小判の包みと、香煙の器具一式とを取出して身に着け、鞆を失ひし脇差を棄て、身軽となり、兼ねてより案内を探り置きし岨そばみち道伝ひに落ち行く。

かくて其夜は人里遠き山中に笹原の露を片敷きて、憐れなる初

花の面影と共寐しつ。明くれば早くも肥前一円に蜘蛛手の如く張り廻されし手配りを、彼方かなたに隠れ、此方こなたに現はれ、昼寝い、夜起きて、抜けつ潜りつ日を重ね行くうちに、いつしか思ひの外なるひた日田の天領に紛れ入りしかば、よき序ついでなれと英彦山ひこさんに紛れ入り、六十六部に身を扮装やっして直江志津の一刀を錫杖に仕込み、田川より遠賀川沿ひに道を綾取りあやど、福丸といふ処より四里ばかり、三坂峠を越えて青柳の宿しゆくに出でむとす。

既に天下のお尋ね者となりし身の尋常の道筋にては逃るべくもあらず。青柳より筑前領の大島に出で、彼かの 処ところより便船を求めて韓からくに国に渡り、伝へ聞く火賊くわぞくの群に入りて彼の国かを援け、清しんの大宗の軍兵に一泡嚙ませ呉れむと思ひし也。

人の運命より測り知り難きはなし。

われ、かく思ひて其の夜すがら三坂峠を越え行くに、九十九折つづらをりなる山道は、聞きしに勝る難所なり。山氣漸く冷やかにして夏とも覺えず。登りくへて足下を見れば半刻ほど前に登り来りし道、蜿々として足下に横たはれり。飴色の半月低く崖下に懸れるを見れば、来し方こかた、行末ゆくすゑの事なぞ坐そろに思ひ出でられつ。流るゝ星影、そよぐ風音にも油断せずして行く程に何処いづこにて踏み迷ひけむ。さまで広からぬ道は片割月の下近く、山島の傍なる溜池のほとりに行き詰まりつ。引返さむとして又もや道をあやまりけむ。山道次第に狭まり来りて、猪、鹿などの踏み分けしかと覺ゆるばかり。山又山伝ひに迷ひめぐりて行くうちに、二十日月いつしか西に傾

き、夜もしら／＼と明け離るれば、遙か眼の下の山合やまあひ深く、

谷川を前にしたる大きやかなる藁屋根あり。浅黄色なる炊煙ゆる

く立昇りて半眠なかばれるが如き景色なり。

扱さては人家ありけるよと打喜び、山岨そばの道なき処を転ぶが如く走

り降り、やゝ黄ばみたる麦畑を迂回まはりつゝ近付き見るに、これな

む一字の寺院にして、山門は無けれど杉森の蔭に鐘楼あり。前庭

の洒掃さいさう浄らかにして一草一石を止めず。雨戸を固く鎖とぎしたる本

堂の扁額には靈鷲りやうじゆせん山、舍利藏寺しやりざうじと大師様の達筆にて草書した

り。方丈の方へ廻り行くに泉石の按配、尋常よのつねならず。総檜ひのきの木

口数寄すきを凝こらし、犬黄楊いぬつげの籬まがきの裡、自然石の手水鉢てうづばちあり。笕かけひの

水に苔蒸むしたるとほり新しき手拭を吊したるなど、かゝる山中の

風情とも覚えす。又、方丈の側面の小庭に古木の梅あり。その形豆に似て、真紅の花を着けたる蔓草、枝々より梢まで一面に絡み付きて方丈の屋根に及べるが、流石さすがに山里の風情を示せるのみ。

われ此等これらの風情を見て何となく不審に堪へず。一めぐりして庫裡ほりの辺より、又も前庭に出で行かむとする時、今の籬うちの裡なる手水鉢あたりの辺に物音して人の出で来る気はひあり。此寺このの和尚にやあらん。如何なる風体の坊主にやと件くだんの蔓草の葉蔭より覗き見るに、出で来るものは和尚に非ず。籬まがきの隙間より洩れ来るは色白く、眉青く、前髪より水も滴らむばかりの色若衆えもんあだの、衣紋仇めきたる寝巻姿なり。白魚の如き指をさしのべて笕の水を弄もてあそぶうちに、消ゆるが如く方丈に入り、内側より扉をさし固むる風情なり。

われ余りの事に呆れ果て、茫然と佇みて在りしが、物好きの心俄かに高まり来りて止み難くなりつ、何気なく前庭に出づるに、早くも起き出でし寺男と思しく、骨格逞ましく、全身に黥したる中老人が竹箒を荷ぎて本堂の前を浄め居り。

われ其男に近づきて慇懃に笠を傾け、これは是れ山路に踏み迷ひたる六部也。あはれ一飯の御情に預り、御本堂への御つとめ許し賜はらば格別の御利益たるべしと、念珠、殊勝氣に爪繰りて頼み入りしに彼の寺男、わが面体の爛れたるをつく／＼見て、まことの非人とや思ひけむ、他意も無げにうち黙頭きつ。此処は筑前国、第四十四番の札所にして弘法大師の仏舎利を納め給ひし靈地なり。奇特の御結縁なれば和尚様の御許しを得む事必

定やうなるべし。暫く待たせ給へとて竹箒を投げ棄て庫裡の方へ入り行きぬ。

それより何事を語らひたりけむ。やゝ暫くありて本堂の中に大きやかなる足音聞こえつ。やがて本堂の正面の格子扉かうしどを音荒らかに開きたる者を見れば、年の頃五十には過ぎしと思はるゝ六尺豊かの大入道の、真黒き鬘くわんろう羽鬚を長々と垂れたるが、太く幅広き一文字眉の下に炯けい々たる眼光を輝やかして吾を見上げ見下す体なり。やがて莞爾として打ち笑ひ、六部殿、庫裡の方よりお上りなされよ。御勤めも去る事ながら夜もすがらの御難儀、定めし御空腹の事なるべし。昨夜の残りの粟飯なりとまゐらせむと云ふ。その音吐朗々おんととして、言葉癖、尋常ならず。一眼にて吾が素性を

見貫みぬきたるものの如くなり。

されども、われ聊いさかも悪わるびれず。言葉の如く庫裡に入りて笈きふを卸し、草鞋わらぢを脱ぎて板の間に座を占め、寺男の給仕する粟飯を湯ゆ漬づけにして、したたかに喰くひ終り、さて本堂に入りて持参の蠟燭を奉り、香を焚たききて般若心経、観音経を誦じゆする事各一遍。つく／＼本尊の容よう態たいを仰うぎ見るに驚く可し。一見尋常一様の觀世音菩薩の立像の如くなるも、長崎にて物慣れし吾眼わがには紛まぎれもあらず。光背の紋様、絡らく頸けいの星章など正しく聖母マリアの像なり。さてはと愈いよ々心して欄間らんまの五百羅漢像をかへり見るに、これ亦一つとして仏像に非ず。十二使徒の姿に紛れも無し。かゝる山間の、人の通ふとも見えぬ小径の奥に立て籠もり、禁断の像を祭り居る

今の和尚は、よも一筋繩にかゝる曲者くせものにはあらず。よし／＼吾に詮術せんすべあり。吾を敵かたきとせば究竟かたきの敵とならむ。又味方とするならば無二の味方となるべしと心に深く思ひ定めつ。何喰はぬ面もちにて殊勝氣に礼拝し終り、さて和尚に請しやうじらるゝまゝに庫裡に歸りて板の間に荒菰こもを敷きつゝ和尚と対座し辞儀を交して煎茶を啜すするに、和尚座を寛くつろげ、われにも膝を崩させて如何にも打解けたる体にもてなし、旅の模様を聞かせよと云ふ。

われ些すこしも躊躇せず。われは御覽の通り、面相の醜みにくきより菩提心を起して仏道に入りし者なりとて、空言そらごとまご眞事取り交せて、尋常の六部らしく諸国の有様を物語るに、聞き終りし和尚は関羽鬚を長々と撫で卸しつ。呵然として大笑いわして曰く。こは面白き御仁

に出で会ひたるものかな。われ平生より人の骨相を見るに長け、
界限の人に請はるゝまゝに、その吉凶禍福を占ひ、過去現在未来
の運命を説くに一度も過つ事なし。今、御辺の御人相を見るに、
只今の御話と相違せる事、雲泥も啻ならず。思ふ事、云はで止み
なむも腹ふくるゝ道理。的中らずば許し給へかし。御辺は廻国の
六十六部とは跡型も無き偽り。もとは唐津藩の武士にして本名
は知らず。片面鬼三郎にて通りし人也。嫁女の事より人を殺め、
長崎に到りて狼藉の限りをつくされしが、過ぐる晩春の頃ほひ、
丸山初花楼の太夫、初花の刑場を荒らし、天地の間、身を置くに
所無く、今日此処に迷ひ来られし人と覚し。如何にや。わが眼
識。誤りたるにやと嘲笑ひて、威丈高にわれを見下したる眼

光、鬼神も縮み上る可き勢なり。

されども、われ些しも驚きたる顔色けしきをあらはさず。莞爾として

笑み返しつ。如何にも驚き入つたる御眼力。多分お上より触れま

はされし人相書を御覧ごらんじたるものなるべし。半面の鬼相包むべく

もあらず。如何にも吾こそは片面鬼三郎と呼ぶるゝ日本一の無調

法者に候。さりながら、われ長崎に居りたる甲斐に、唐人の秘法

を習ひ覚え、家相を見るに妙を得たり。すなはち此の寺の相を觀み

るに、是これまことの天台宗の寺に非ず。本尊は聖母マリアにして

羅漢は皆十二使徒なり。美しき稚児ちごを養ひて天使なぞらに擬ふる御辺の

御容体は羅ローマン馬カトリク加特里克か、善主ゼスイト以登か。いづれにしても禁断の

邪教、切支キリシタン丹婆バテレン天蓮ともがらの輩に相違あるまじと云ひ放つ。その言葉

の終らぬうちに和尚の血相忽然として一変し、一間ばかり飛び退りて、懐中ふところに手を入れしと見る間に、金象眼したる種子島たねがしまの懐中鉄砲を取出し、わが胸のあたりに狙ひを付くる。しかも眼を定めてよく見れば、長崎にて噂にのみ聞きし南蛮新渡来の燧ひうち器械ぎかいつき付、二聯筒れんづつなり。使ひ狙れたる和尚の物腰、体の構へ、寸毫の逃るゝ隙も見えざりけり。

さては此の和尚。天台寺の住寺とは伴いっはり。まことは切支丹婆キリシタンバ天蓮テレンの徒と思ひしが、それも伴いっはり。そのまことは、かゝる山中に潜み隠れ居る山賊夜盗の首領なりしかと今更に肝を消しつ。片面鬼三郎生年二十四歳、此処に生命いのちを終るかと観念の眼を閉ぢむとする折しもあれ、和尚の背後、方丈に通ふ明障子あかりしやうじの半開きた

る間より紫色の美しき物影チラ〜と動けり。最前見たる色若いろわか衆しゆと思しく半面をあらはして秘かに打ち笑ゑみつ。手真似にて斬れ〜。その鉄砲は無効だめだめ々と手を振る体なり。

扱さては天の助くる処か。心は神業かみわざ。運命は悪魔のわざとこそ聞け。一か八かと思ふ間あらせず。背後の上り框かまちに立架たてかけたる錫杖取る手も遅く、仕込みたる直江志津の銘刀抜く手も見せず。真正面より斬りかゝる。その時、和尚の手中の火打種子島ひうち たねがしま、パチリと音せしのみにて轟薬発せず。その毛だらけなる熊の如き手首、種子島を握りたるまゝ、わが切尖きつさきにかゝりて板の間へ落ち転ころめけば、和尚悪獣の如き悲鳴を揚げ、方丈かたの方へ逃げ行かむとするに、彼かの若衆、隔ての障子を物蔭より詰めやしたりけむ。一寸も

動かず。驚き周章あわて、押破らむとする和尚の背後より跳をどりかゝり、左の肩より大袈裟がけに切りなぐり、板の間に引き倒ふして止とどめ刺す。

われ、生れて初めての強敵を刺しと止めし事とて、ほつと一息、長き溜息しつゝ、あたり見まはす折しもあれ最前の若衆、血飛沫ちしぶき乱れ流れたる明障あかりしやうじ子を颯さつと開きて走り寄り、わが腰こしごろも衣えに縫り付きつゝ、やよ鬼三郎ぬし。わらはを見忘れ給ひしかと云ふ。驚きて振上げし血刀を控へつゝ、よくく見れば這こは如何に。故郷唐津にて三々九度の盃済ましたるまゝねや閨ねやの中より別れ来りし彼かの花嫁御お奈美殿にぞありける。

こは夢か。まぼろしか。如何にして斯かかる処に居給ふぞ。此の

和尚は御身の如何なる縁故えにしに当る人ぞと畳みかけて問ひ掛くるに、その時、お奈美殿の落付きやう尋常ならず。そのお話は後より申上ぐべし。まづく此の死骸を片付くるこそ肝要ならめ。参詣の人々の眼に止まりなば悪あしかりなむ。こやく馬十よく。お客様に水参ゐらせぬか。荒縄持ちて来らずやと手をたゞくに、最前の遅ましき寺男、勝手口より落付払ひて、のそくと入り来り、改めてわれに一礼し、柄杓ひしやくの水を茶碗に取りてわれにすゝめ、和尚の死骸を情容赦もなくクルくと菰こもに包み、荒縄に引つくゝりて土間へ卸しつ。さて血潮にまみれたる障子と板の間を引き剥がし、裏口を流るゝ谷川へ片端かたはしより投込ていむ体、事も無げなる其そのおも面もち。白痴か狂人かと疑はれ、無気味にも亦恐ろし。

かゝる間に若衆姿の奈美殿は、方丈の^{かた}方の寢床を片付けて、われを伴ひ入り、かぐはしき新茶をすゝめつゝ語るやう。さるにても御身の唐津を立退^のき給ひし時、申すも恥かしき吾が不^ぶ躑^{しつ}、御咎めも無く、わが心根を察し賜はりて、継母と仲人への^{うらみ}怨を晴らし賜はりし男らしき御仕打ち、今更に勿体なく有難く、これをしも恋心とや云ふらん。恐ろしかりし鬼三郎ぬしの御顔ばせ夜毎、日毎に頼もしく神々しく、面影に立ち優^{はべ}り侍り。

さは去りながら其折の藩内の騒動は一方ならず。御身の御両親も、わが父君も家道不取締の廉^{かど}を以て程なく家碌を召し放され給ひつ。そが中に御身の御両親、御兄弟の御行末は如何^{いかゞ}ありけむ。わが身は父上と共に家財を^{うりしろ}売代なし、親子の巡礼の姿となりて

四国路さして行く程もなく、此の山中に迷ひ入り、此の寺に一夜の宿を借り候ひぬ。

去る程に此寺の住持なりし彼の和尚は、もと高野山より出でたる真言の祈祷師にて御朱印船に乗りて呂宋ルソンに渡り、彼地かのにて切支丹の秘法を学び、日本に帰りて此の魔寺を起し、自ら住持となりし万豪阿闍梨あじやりと申す者に侍りはべ。先程より察し給へる如く、世にも恐ろしき悪僧にして、山々の尾根くを駈けめぐる事、わが庭内の如く、火打鉄砲にて峠々の旅人を脅やかし殺し、奪ひ取りし金銀財宝を本堂の床下に積み蓄へ、女と見れば切支丹秘法の魔薬にかけて伴ひ来り、有無を云はさず意に従へ、共々に快樂ふけに耽り、やがて又、新しき女性を捕へ来れば、前なる婦人を彼の寺男、馬

十に与へて弄ばさせ、遂には打殺させて山々谷々の窮隈々々に埋めさせ来りしもの。五月雨の生暖かき夜などは彼方の峯、此方の山峽やまかひより人魂の尾を引きこのて此寺の方へ漂ひ寄り来るを物ともせぬ強氣者したゝかものに候ひしが、妾わらはを見てしより如何様にか思ひ定めけむ。

その翌あくる朝早く、父上は吾が身の行末を頼む由仰せ残されて四国へ旅立ち給ひぬとて、ひたすらに打泣く妾わらはをいたはり止めつ。今より思へば殺し参ゐらせたらむやも計り難けれど、世知らぬ乙女心のおぞましさに其時は夢更心付き候はず。これはこれ切支丹の煙草唾妣烟オヒエムなり。これを吸ひて睡り給はば、旅路を行き給ふ父上の御姿見ゆべしなぞ仮りて喫はせられし香はしき煙に酔ひて

眠るともなく眠り候ひしが、その間に吾身は悲しくも和尚のものと成り果てはべり。

さる程に不思議なる哉、一度、吸ひし唾オヒエム煙の酔ひ心地、その日より身に泌み渡りて片時も忘るゝ能はず。妾は父上の御事、鬼三郎ぬしの御事、又は明日あすをも計り知られぬ身の行末の事など、跡かたもなく忘れ果てゝ此寺に留まり、和尚の心のまゝに身を任せつゝ、世にも不思議なる年月を送り侍りぬ。

又、彼の馬十と呼べる下男は此処より十里ばかり東の方、豊前小倉城下の百姓にて、宮角力すまふの大関を取り、無双の暴れ者なりし由。仲間の出入りにて生命危いのちふかりしを万豪和尚に救はれしものに侍り。和尚の与へし切支丹煙草、唾オヒエム煙を吸ひしより以この来、

魂虚洞呂うとろの如くなりて心獸の如く、行ひ白痴の如し。たゞく牛馬の如く和尚の命に従ひて、此寺の活計なりはひ、走使はしりづかひなぞを一心に引受け居り候ひし者。その後、妾、此寺に來りし後は、何となく妾を慕ひ居るげにて、和尚の言葉よりも、わが云ひ付けをのみ喜び尊み、事あれば水火をも辞せざる体ていに侍り。まことに不憫の者と存じ候へ。

さる程に妾、虫の知らせにかありけむ。今朝けさは、いつにも似ず早く眼醒めつ。御身の此寺に近付き給へるを垣間見かいまみ、如何はせむと思ひ惑ひ候ひしが、所詮、人間道を外れし此身。神も仏も此世には在ましまさずかし。今は何ともならばなれと思ひ定めて和尚の枕元なる種子島の弾丸、轟薬を二つながら拔取り、代りに唾液つばに

て嘯みたる紙玉を詰め置き、さて扱、和尚を揺起して、かくくの人、六部の姿して此寺に來ませしと、世間の噂、取り交せて告げ知らせしに和尚、打喜ぶ事ひとかた一方ならず。好的々々よし／＼。汝が昔の恋人をちなます血脛にして、汝と共に杯を傾けむ。なれ外道至極の楽しみ、之に過げだうぎしと打笑ひつゝ起上りしが、遂に妾が計略に掛かりて、今の仕儀となり果て終りしものに侍り。

かく浅ましく汚れし身の昔を語るも恥かしや。さるにても鬼三郎ぬし。恋は昔にかはらぬものを。かく成り果てし吾身わがみをいとしと思ひ給はぬにか。御身の思召おぼしめし一つにて、わらはの思ひ定むる道も変りなむ。わらはの真心の程は、和尚の死骸なきがらを見ても眼まのあたりまなじりに思ひ知り給ふべしと、思ひ詰めたる女の一念。皆を輝やか

す美しくしき。心も眩むばかり也。

われ喜ぶ事一方ならず。思はずお奈美殿の前にひれ伏しつ。有難し。忝し。世間の噂は皆実正なり。まことわれと吾身に計り知られぬ罪業を重ねし身。天下、身を置くに処無し。さすがほつたい流石法たい体の身の、かゝる処に来合はせし事、天の与ふる運命さだめにやあらんずらん。われと解ほどきし赤繩えにしの糸の、罪よごに穢れ、血にまみれつゝめぐりくゝて又こゝに結むすぼるゝこそ不思議なれ。御身は若衆姿。わが身は円頂黒衣。罪障、悪業に埋もれ果つれども二人の思ひに穢れはあらじ。可憐いとの女ひとよと手を取らむとすれば、若衆姿の奈美女、恥ぢらひつゝ、の払はらひ除のけ。心急せき給ふ事なかれ。まづ此方こち方へ入らせ給へ。見せ申すべきものありとて、われを本堂の内陣に誘ひ、壇に登りてマリ

ア像の肩に両手をかけ、おもむろに前へ引き倒ふすに、その脚の下の蓮台と思しきものおぼの辺あたり、左右に引き開け、階段の降り口、大きく開けたり。その下へ二人して降り行くに一度倒ふれしマリア像は自から共に立ち降りたるらし。階段は真の闇となりて足音のみぞ、おどろくしくより増りけるまさ。

奈美女、わが手を取りて其の中を二三間ほど歩み降り行くに、土中の冷氣身に泌みて知らぬ世界へ来し心地しつ。やがて彼女の手より閃めき出でし蘭法附木の火つけぎ、四方に並べし胡麻燈油の切子きぎ硝子燈籠りことうろに入れば、天井四壁一面に架け列ねしギヤマン鏡に、何千、何百となく映りはえて、二十余畳にも及ぶべき室内、さながらに白昼の如く、緞子の長椅子どんす、鳥毛の寝台とりげ、絹紗の帳とぼり、眼を驚

かすばかりなり。又青貝の戸棚に並びたるは珍馱婁ちんだるの媚酒、羅ロワン王中チユンの紅艷酒。蘇古珍スコチンの阿羅岐烧酎アラキ。ギヤマン作りの香煙具。

銀ビイドロの水瓶。水晶の杯なぞ王侯の品も及ばじな。前の和尚の盗み蓄たくはめにやあるらむ。金銀小判大判。新鑄の南鐐銀のたぐひ花模様絨氈の床上に散乱して、さながらに牛馬ウマの余瀝よれきの如し。

そが中に突立ちたる奈美女は七宝の大香炉に白檀の一塊を投じ、香雲縷々るゝとして立迷ふ中より吾をかへりみて、かやくと笑ひつゝ、此の部屋の楽しみ、わかり給ひしかと云ふ。

流石さすがのわれ言句も出でず。総身に冷汗する事、鏡に包まれし蠶がまの如く、心動顛し膝頭、打ちわなゝきて立つ事能はず。ともかくも一度、方丈に歸らむとのみ云ひ張りて、逃ぐるが如くマリア像

の下より這ひ出でしこそ笑止なりしか。

されどもわれ、つひに此の外道げだうの惑ひを免るゝ能はず。此の寺

に踏み止まりて奈美女と共に昼夜をわかたず、冬あたゝかく夏涼

しき土つちぐら窖の中に、地獄天堂を超えたる不可思議の月日を送り行

くに怪しむ可し、ひととせ一年の月日もめぐらさぬうちに、何時いつとなく氣

力衰へ来る心地しつ。万豪和尚より習ひ覚えしといふ奈美女の優

れたる竹抱、牛血、大蒜にんにく、人參、獸肝、茯苓草ぶくりやうさうのたぐひを

浴びるが如く用ふれども遂に及ばず。果ては奈美女の美しく化粧

せる朝夕のうしろ姿を見る事、虎狼よりも恐ろしく思はるゝやう

になり来りぬ。

こゝに不思議なるは、彼の寺男の馬十なり。

彼の男、毎日未の刻より申の刻さがるに到る間の日盛りは香煙を吸ふ

と称して何処へか姿を消しつ。そのほかは常に未明より起き出で、

田畠を作り、風呂を湧かし、炊爨すいさんの事を欠かさず。雨降れば五

六里の山道を伝ひて博多に出で、世上の風評を聞き整へ、種くさ／＼

々、の買物のほかに奈美女の好む甘き菓子、珍らしき干物ひもの、又は

何処いづこより手に入れ来るやらむ和蘭オランダの古酒などを汗みづくとな

りて背負ひ帰るなんと、その忠実まめ々々しき。身体くつきの究やう竟さ。

まことに奈美女の為ならば生命いのちも棄て兼ねまじき気色なり。

さはさりながら奇怪千万にも馬十は、われを主人とは思ひ居ら

ざるにやあらんずらん。わが云ひ付けし事は中々に承うけ引かず。

わが折入つて頼み入る事も、平然と冷笑あざわらふのみにして、
 搦はか

々、しき返答すら得せず。奈美女の言葉添なければ動かむともせ

ざる態さまなり。われ其の都度に怒気、心頭に発し、討ち捨て呉れむ

と戒かいたう刀を引寄せし事も度々なりしが、さるにても彼を失ひし後

の山寺の不自由さを思ひめぐらして辛くも思ひ止まる事なりけり。

然るに此の山寺に来てや、一年目の今年の三月に入り、わが気

力の著じるく衰へ来りしより以このかた来、彼の馬十の顔を見る毎に、

怪しく疑ひ深き瞋しんに恚の心、しきりに燃え立ちさかりて今は斯かう様よ

と片膝立つる事屢しばしば々なり。後は何ともならばなれ。わが気力の

衰へたるは、此この程、久しく人を斬らざる故にやあらんずらん。さ

らば此この男の血を見たらむには、わが気力も昔に帰りてむかなぞ、

日毎に思ひめぐらし行くうちに此の三月の中半なかばの或る日の事なり
き。

頬冠りしたる彼かの馬十、鋤を荷かつぎてわが居る方丈の背面うしろに來り、
彼の梅の古木の根方を丸く輪形に耕して、豆のやうなる種子を蒔
き居り。その上より下しも肥こえを撒きかけて土を覆ひまはるに、その
臭き事限りなく、その仕事の手間取る事、何時いつ果つべしとも思は
れず。

われ思はず方丈の窓を引き開きて言葉鋭く、何事をするぞと問
ひ詰なりしに、馬十かたの如く振り返り、愚かしき眼付にてわれを
見つめつゝ、もやくと嘲あざみ笑ふのみ。頓とみには応いらへもせず。やが
て不興お氣なる面おももちにて黄色なる齒を剥き出し、低き鼻尻に皺を

刻みつ。這こは和蘭オランダ陀伝来のくれなるの花の種子を蒔くなり。此等これら
 の秘蔵の種子たねにして奈美殿の此上こよなく好み給ふ花なり。此村このの名
 主の家のほか他所よそには絶えて在る事無し。此処こゝに蒔き置けば、夏
 の西日を覆ひ、庭の風情ともなるべきぞや。去年の春、此処こゝへ迷
 ひ来給ひし時、見知り給ひしなるべし。毎年の事なり。暫く辛棒
 し給へ。臭くとも他人の垂れしものには非あらざるべしと云ふ。扱さては
 彼の時の珍花の種子を此男このの取置きしものなりしかと思ひけれど
 も、何とやらむ云ひ負けたる気はひにて心納まらず。小賢こゝかしき口
 返答する下郎かな。腹の足しにもならぬ花の種子を蒔きて無用の
 骨を折らむより此間この、申し付けし庫裡くらの流し先を掃除せずや。飯
 粒、茶粕たくの類たぐひ淀み滞りとゞこほて日盛りの臭き事ひとかた一方ならず。半月も

前に申付けし事を今以て果さぬは如何いかになる所存にか。主人に向ひて口答へする奴。その分には差し置かぬぞと睨ねめ付くれば、彼かの馬十首を縮めて阿呆の如く舌を出し。われはお奈美様をこそ主人とも慕ひ、女神様とも仰ぎ来つれ。御身の如き片輪かたは風情の迷ひ猫なんでうを何なん条主人と思はむや。御身が此の馬十を憎み、疑のろひ咀へる事を、われ早くより察し居れり。打ち果さむとならば打ち果し給へ。万豪和尚様の御情にて生き伸び来りし此の生命いのち。何の惜しむ処ところかあらむ。たゞ後にて後悔し給はむのみと初めて吐はききし雑言ざつごんに今は得堪へず。床の間の錫杖取る手も遅く直江志津を抜き放ち、縁側より飛び降りむとせしに、背後の庫裡の方よりあれよとばかり、手を濡らしたる奈美女走り出で、逸いちはや早くわれを遮り止めつ。涙

を流して云ひけるやう。こは乱心し給へるか。馬十亡き後、如何にしてわれ等が命を繋つなぎ候べき。御身此頃、俄かに心弱り給へるは、左様の由無き事ども思ひ続け給へる故ぞかし。人を斬り度くば峠々に出で、旅人をも待ち給へかし。馬十ばかりは此寺の宝物なり。われ等が為には無二の忠臣に候はずや。身に代へて斬らせ参らする事あらじと云ふうちに、馬十と怪しげなる眼交めくばせして左右に別れ、われ一人を方丈に残して立去りぬ。

さて其の後、二人とも何処いづこにか行きけむ。声も無く、足音もきこえず。半刻はんときあまりの間、寺内、森閑として物音一つせず。谷々に啼く山鶯の声のみ長閑のどかなり。

わが疑心又もや群り起り、嫉妬の心、火の如くなりて今は得堪

へず。錫杖の仕込しこみ刀を左手ゆんでに提げて足音秘めやかに方丈を忍び出で、二人を求めて跣足はだしのまゝ本堂の周囲を一めぐりするに、本堂の階段の下に微かながら泥の跳ね上りし痕跡あとあり。其処より床下へ匍もひ入り行くに積み並べたる炭俵の間に、今まで知らざりし石の階段あり。その階段の下より嗅ぎ慣れし白檀の芳香、ゆるやかに薰かじ来る気はひあり。

われ心に打ちうなづき、薄湿しめりせる石階のほの暗きを爪つまさぐ探りて、やゝ五六段ほど降りくだ行きしと思ふ処に扉おぼと思しき板戸あり。その中央に方五寸ほどの玻璃はり板を黒き布にて蔽おほひたるが嵌はめ込み在り。いか様あなぐら、窶あなぐらの中の様子を外より覗のぞきたよりと為せる体ていなり。彼かの馬十が覗のぞきしものにかあらむと心付けば、今更におぞましき

限り無く、身内に汗ばむ心地しつ。われも其の真似をするが如く、息を凝らして覗き見るに、たちまち忽たちまち然、神氣逆上して吾が心も、わが心ならず。一気に扉を押し破りて窖あなぐらの中に躍り入り、呀あつと逃げ迷ふ奈美女の白き胴体を、横なぐりに両断し、総身の黥いれずみを躍らせ、て掴みかゝる馬十の両腕を水も堪まらず左右に斬り落す。続いて足を払はれし馬十は、齒を剥き眼を怒らして床上に打ち倒ふれつ。振り上ぐるわが刀を見上げつゝ吠え哮たけるやう。おのれ横道者。おぼえ居れ。奈美女は最初よりわが物なり。前の和尚と汝は間男なりし事を知らずや。この年月、奈美女の情により養はれ来りし恩を仇にする外道の中の外道とは汝が事ぞや。神や仏は、あらずもがな。人の一念残るものか残らぬものか今に見よ。此怨み、や

はか返さでやはあるべき。その証拠に今日植ゑしくれなるの花を
 今年よりは真白く咲かせて見せむ。彼の花かの白く咲かむ限り、此
 の切支丹寺に、われ等の執念残りと思へ。此の怨み晴れやらぬ
 ものと思へと狼の吠ゆるが如く喚わめき立つるを、何を世迷言よまひご云
 ふぞ、と冷笑あざひつ。此世は此世限り。人間の死後に魂無き事、犬
 猫に同じきを知らずや。汝等男女こそ覲てきめん面の因果応報、思ひ知
 らずやと云ひも終らず、馬十の脳天を唐竹割にし、奈美女の死骸
 を打重ねて止刺刀とどめを刺し、その上より部屋の中の珍宝、奇具かを片
 端たはしより覆へして打重ねたるまゝ本堂の下を潜りて外に出で、血
 刀と衣服を前なる谷川に洗ひ浄めて、悠々と方丈に帰り来りぬ。

去る程に其の日の残る半日の暮れつ方まで、われは只ひたすら管に恍

惚として夢の中なる夢の醒めたる心地となり、何事も手に附かず、
 夕餉ゆふげの支度するも倦ものうく、方丈の中まんなか央あふのに仰向あふのきに寝ね伸びて、眠
 るともなく醒むるとも無くて在りしが、扱さて、夜に入りて雨の音し
 めやかに、谷川の水音いやす弥増るを聞くに付け、世にも不思議なる
 身の運命、やうくくに思ひ出でられつ。床に入りても眼まなこ、冴え／
 ”として眠むられず。

眠むられぬまゝに思ふやう。神も仏も在ましまさぬ此世に善悪の
 けぢめ求むべき様なし。たゞ現世の快樂けらくのみこそ眞実ならぬ。人
 の怨み、誹そしりなど、たゞ過ぎ行く風の如く、漂ふ波にかも似たり。
 人間万事あとかたも無きものところ思ひ悟りて、腕にまかせ、心
 に任せて思はぬ快樂けらくを重ね来りしわれなりしか。その行末の樂し

みの相手なりし者を討ち果したらむ今は、わが身に添ひたる、もろくの大千世界を打ち消して漕てしも無き虚空に、さまよひ出でし心地しつ。明日よりは何を張はりあひ合あひに生きむと思へば、世にも哀れなるわが姿の、今更のやうに面影に立つさへ可笑し。

やよ鬼三郎よ。明日より何いづかた方へ行かむとするぞ。汝が魂、何いづこ処にか在る。今までの生涯は夢なりしか。現うつゝなりしか。まこと人の心に神も仏も無きものか。人の怨み、わが身の罪業を思ひ知りて神仏の御手に縋すがらむと思はずや。天地の大を以て見れば、さしも強豪、無敵の鬼三郎も多寡たかの知れたる一匹の蛆虫うじむし。何処いづこより蠢うごめき来り。何処いづこへ蠢うごめき去らむとするぞ。やよ鬼三郎。何処いづこへ行くぞと。大声にて叫ぶ声、われとわが耳に入りて夢醒むれば、

何時いつの間にかまどろみけむ。夜は白々と明け離れて、向山むこやまの杉の梢に鴉の啼く声しき頻り也。

われは、それより力無く起き上り、本堂下の窖あなぐらに入りて、男女の屍体を数段に斬り刻み、裏山の雑木林の彼処かしここ此処こゝに埋め終りつ。さて残りたる米を粥に作りて何の味あじはひも無く腹を満たし、梅干、塩、味噌などを嘗めながら、日もすがら為す事も無く方丈たに閉て籠もり、前の和尚の使ひ残したる罫紙を綴ぢ、今までの事を斯様かやうに書き綴り行く程に思ひの外に筆進まず。二月がほど日を送り、早くも梅雨上りの若芽萌え立つ今日の日はめぐり来りぬ。

さる程にわれ、今朝の味爽まだきより心地何となく清すがく々しきを覚え

つ。小暗をぐらきまゝに何心なく方丈の窓を押し開き見るに、思はずあつと声を立てぬ。

此間馬十が植ゑ蒔きし梅の根方のくれなるの種子、いつの間にか芽を吹きにけむ。窓の上の屋根に打ちかぶさるばかりに茂り広がりたるが、去年こその春見しが如き、血の色せる深紅の花は一枝も咲き居らず。屍肉の如く青白き花のみ今を盛りと咲き揃ひ居りしこそ不思議なりしか。

此時のわが驚き、いか計ばかりなりけむ。彼かの馬十が末期に叫びし言の葉を眼の前に思ひ知りて、白日の下、寒かん毛まうし竦しょうりつ立し、心気打ち絶えなむ計ばかりなりしか。

さてこそ人の怨みは此世に残るものよ。神も仏もましますもの

よと思へばいとゞ空恐ろしく、思はず本堂によるめき入りて御本尊の前に両手を合はせ。何事のおはしますかは知らず。申訳無く面目無し。かしこき天地の深く大なる心を凡夫の身勝手に推し計りしことのおぞましきよ。此上に生き長らへて罪業を重ねむより、死して地獄の苛責に陥ち、今までの罪の報いを受けむこそ中々に心安けれ。一念弥陀仏、即滅無量罪障と聞けど、わが如き極重悪人の罪を救はれざらむ事、もとより覚悟の前ぞかし。南無摩里阿如来。南無摩里阿如来と両手を合はせて打泣きくゝ方丈に帰り来りつ。さて流るゝ涙を堰きあへず。迫り来る心を押し鎮めて此文を認め終りぬ。

われ今より彼の窖に炭俵を詰めて火を放ち、割腹してそが中に

飛入り、寺と共に焼け失せて永く邪宗の門跡を絶たむとす。たゞ此の文と直江志津の一刀のみは鐘樓の鐘の下に伏せ置き、後日の証^{あかし}拠とし、世の疑ひを解かむ便^{よすが}とせむ心算^{つもり}なり。

なほ刀の中心^{なかご}に刻みし歌は、わが詠みしものを下の村の鍬鍛冶^{くはかぢ}に賃して刻ませしもの也。唐津藩に齎^{もた}らし賜はらば藩公の御喜びあるべく、此文の偽^{いつはり}ならざる旨も亦明らかなるべしと思ひ計^{はか}りてなせし事なり。歌の拙^{つた}なきを笑ひ給ふ事なかれ。

のこる怨み白くれなるの花盛り

あまたの人をきりしたん寺

寛永六年五月吉日

鬼三郎しるす

×

×

×

それから十四五日経ってから例の古道具屋の貫七爺しじいが又遣つて来た。骨だらけの身体からだに糊の利いた浴衣、紹ろの羽織を引っかけて扇をパチパチいわせている姿は如何にも涼しそうである。

私は夏肥りに倦たみ切つた身体からだを扇風器に預けていた。

「あの白い花の正体がおわかりになりましたでしょうか」

「ウン。わかつたよ。九大農学部に僕の友人が居ると云つたね」

「へエへエ。たしか加藤博士様とか」

「馬鹿。そんな事云やしないぜ。第一博士じゃない。富士川といつて普通の学士だがね。所謂万年学士という奴だ。植物の名前なら知らないものはないという」

「ハイ。エライもので御座いますな」

「そいつにあの花を送つて調べさしてやったら、いくら研究しても隠元豆に相違ないと云うんだ」

「へエツ。どちらが隠元豆なんで……」

「どっちも隠元豆なんだ」

「テヘツ。飛んだ変幻豆でげすな」

「洒落にもならない話だよ。もつとも隠元豆にも色々あるそうで、何十通りとか変り種がある。その中でもあの紅い方あかの方は、昔から

観賞植物になつていたベニバナ・インゲンという奴で、白い方が普通の隠元豆なんだが、しろうとめ素人眼には花の色を見ない限りちよつと区別が付きにくいという」

「成る程。奇妙なお話もあればあるものでげすな。へエ」

「まつたくださいよ。そこでその富士川つて学士も念のために、わざわり野生の切支丹寺まで行つて調べて来たんだそうだが、すつかり野生になつているので、いよいよ紅花べにばないんげん隠元に似ていたという。吾々が見たつてわからない筈だよ」

「へエツ。どうしてソレが又、入れ代つたんで……」

「何でもない事さ。君はこの書付を読んだかい。鬼三郎の一代記を……」

「へエ。初めと、おしまいの方をちつとばかり拝見致しましたが」
「ウン、この中に書いてある寺男の馬十という奴が、近いうちに
主人公の鬼三郎に殺される事を知つていたんだね。だから今の紅
花隠元を蒔くふりをして実はあたりまえ普通の隠元豆を蒔いたんだ
よ。ちゃんとわかっている」

「へエ。驚きましたね。しかし旦那様。酔狂な死に方をする奴が、
あればあるもので御座いますねえ」

「それあ今だつて在るよ。班長殿から死ねと云われましたと遺書
を残して自殺する兵隊も居る位だからね。こんな風にヒネクレて
いた奴なら遣りかねないだろう。好いた女と一所に殺されて、後
に崇りを残すなんて仕事が、馬十の痴呆ほうけた頭には、たまらなく

楽しみだつたかも知れないね」

「へエへエ。成る程ナ。しかし旦那様。その切支丹の跡を御別荘にお求めになりますか。如何でげしようか。実はまだ区長さんの処に下駄を預けておりますが」

「まあ見合わせようよ。折角だが……この刀を抜いて見たただけでも妙に涼しくなつて、ゾクゾクして来るようだからね。ハツハツハツハツハツハツ……」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：ちはる

2001年4月11日公開

2006年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

白くれない

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>